

【専大校友を訪ねて】 LLDC(後発開発途上国)の援助活動に取り組む 石井みのりさん(平7・文)

インドシナ半島のラオスで3年間、教育や障害者の支援活動を続けてきた石井みのりさん。3月からは中央アジアのブータンで、新たな開発援助に取り組んでいる。

「海外で活動を」と夢に描き、英語を専門的に学びたいと、都立保谷高から指定校推薦で専大文学部英米文学科に入学。在学中、レディング大学など念願の英国留学を長期と短期の2度果たしたが、現在、国際的に活躍する石井さんの語学力は留学中ではなく専大での学業の中で得た。

「日々の予習、復習を必ずこなし、出来るだけ英語環境にいるよう心がけました。授業以外は図書館で文献を読む毎日でした」

95年に卒業後、英国でトップクラスのウォーリック大学大学院に進学。優秀賞と共に修士号「MA in Gender & International Development」を取得した。専門性を身につけた後、地球的規模でのNGO活動を始めた。

98年、NPO法人「難民を助ける会」のラオス事務所の初代代表に就任。現地で教育施設の整備、車いす製造施設などを数々、実現させた。

世界のLLDC(後発開発途上国)に選定されるラオスは、教育・保健制度や社会基盤整備の遅れ、貧困など多くの問題を抱える。そんな状況でも「ラオス人は穏やかで、誇りを忘れない民族です」

ある小学校建設プロジェクトで、村の子供たちが自ら進んで建設作業を手伝い、泥んこになっている姿を目の当たりにした。真摯な情熱を持つ人々の笑顔を支えに、難題にも行動力とネットワークで切り開いていった。

ラオスは今年2月まで滞在。現在は、同じくLLDCのブータンを活動の拠点に、国際協力事業団(JICA)のティンパー事務所で、企画調査員として同国の貧困削減とインフラ整備を担う。

「その時その時を一生懸命生きる」—国際舞台で活躍する石井さんの指針だ。

〔4月15日/ニュース専修10面〕